

やまい いたびね いい うつわ わう きそ ひのき
すべて山居といひ旅寝と云、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜
がさ こし すがみのばかり まくら うえ はしら かけ ひる まれまれ うひとびと
笠、越の菅蓑計、枕の上の柱に懸たり。昼は稀々とぶらふ人々に
こころ うご みやもり おきな さと どもいりき
心を動かし、あるは宮守の翁、里のおのこ共入来たりて、いのしし
いね い うさぎ まめばた う わがき のうだん ひすで
の稲くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞きしらぬ農談、日既
やま は やざしずか つき ま かけ ともな ともしび とり
に山の端にかかれれば、夜座静に月を待ちては影を伴ひ、燈を取
もうりよう ぜ ひ
ては罔両に是非をこらす。

【大体の意味内容】

やまず たびさき きぶつ そな ひつよう
いったい、山住まいではあり、旅先ではあり、これという器物を備える必要もない。た
きそ ひのきがさ こしじ すがみの まくら うえ はしら か ひる ひとびと
だ木曾の檜笠と、越路の菅蓑だけを枕の上の柱に懸けた。昼は、まれにたずねてくる人々
なに かんしや みやもり
をもてなしたり、何かといただきものをしてありがたいことだと感謝する。あるいは宮守
ろっじん さと おとし ともやまばなし い いのしし いね
の老人や、里の男たちがやってきてはあれこれと四方山話をして行ってくれる。猪が稲
く あ うさぎ まめばたけ はじ き のらばなし おもしろ ひ やま
を食い荒らすとか、兎が豆畑にやってくるとか、初めて聞く野良話が面白い。日が山の
は とうる ぎ つき ま つき すがた かけ う
端にかかるころ、夜の座にすわって月を待つと、やがて月ものぼりわが姿に影が生まれる。
ともしび かげ そとがわ うす もうりよう う そうじ
燈火をかかげると、ゆらゆらと影の外側に薄い罔両が生まれてくる。『莊子』における影
もうりよう もんどう おも わたし なに い おも
と罔両の問答も思いだされ、私はいったい何によって生かされているのだろうと、思い
めく
を巡らせてしまうことだ。

「罔両と影の問答」は『莊子』齊物論第二(三十五)に出ています。()

岡両、影に問ふ曰わへ、「曩いほ子行き、今は子止まわろ。曩いほ子坐し、今は子起し。

何ぞ其れ特操無きや」と。影の曰わへ、「吾れは待つ有りて然る者か。吾が待つ所も、又待つ有りて然る者か。吾れは蛇蛭・蜩翼を待つか。悪くんぞ然る所以を識らん。悪くんぞ然る所以を識らん」と。

【大体の意味内容】

ある時、影をひきちぎる岡両つきの薄影が、影に質問した。「君は、さっきまで行っていたのに今は立ち止まり、さっきまで坐っていたのに今は起ち上がっている。どうしてそんなに主体性のない動き方をするのだ。あんまり節操がなさすぎるではないか（もっといっからしてくれな」と、僕まで迷惑するじゃないか」と。すると影が答えた。「なるほど、わしは頼むところ、つまり人間の肉体という形につき従い、それが動くままに動いているのかもしい。だが、わしがつき従っている人間の形そのものも、また別に頼るところがあり、その何ものかに従って動いているのではあるまいか。わしは、蛇の腹のうろこや蟬の羽のような、はかないものを頼りにしていることになるのだろうか。自然の変化のままに従っているわしにとっては、なぜそうなるのかも分からないし、なぜそうならないのかも分からない」と。

「主体的」に生きていると思ひこんでいる私たち人間も、じつは親をはじめいろんな人たちの世話になって生かされていますし、その親たちもまた、その前の親、社会的常識や制約、自然条件など様々なことの影響を受けて、やはり生かされています。影響を及ぼす原因に注目すればまた、その原因となっている者も、またさらに別の物の影響を受けている。どこまでさかのぼっても、唯一絶対の根源など見つかりません。キリスト教などの唯一神を信仰する人たちにとっては、その唯一絶対の神がすべての根本原因なのですが、証明できることではありませんね。

少なくとも私たちは、何か大きな意思のような者によって生かされていると考えればよいでしょう。全てから独立した「自分」とか「主体性」などと考えること自体、はなはだしい傲りであり、はかない妄想に過ぎないと、『莊子』は伝えようとしているのかと思います。

人生そのものを旅として生きる芭蕉も、そんな自身の生命存在が、常に何か大いなるものに翻弄され生かされていることを実感しているのでしょう。またそうして、自分の中に在る宇宙原理に従って生きるということが、大きな意味での「主体」的生活であるとも、悟っているのでしょう。